

音楽科教育におけるヴォーカルパーカッションの 演奏指導に関する研究

—— 8ビートの完成を目指して ——

渡辺 興司*・藤田 文子**

(2013年9月17日受理)

Research on performance instruction of the vocal percussion in Music Education
: Aim at completion of eight beats

Koji WATANABE and Ayako FUJITA

キーワード: 音楽科教育, ヴォーカルパーカッション, 演奏指導

近年、メディアで取り沙汰される機会の多くなったヴォーカルパーカッションは、口や声のみを使って音を出す、リズム奏法である。このヴォーカルパーカッションは、音を出す場所や道具を必要としない手軽さをもち、一方で身体的な差異に影響なく上達が可能ということから、教材として教育的価値の高いものであると考えられる。

本論文では、ヴォーカルパーカッションの演奏法について解説されている書籍を比較し、ヴォーカルパーカッションとして遜色のない、そして習得が容易な演奏法を検討する。それを元に、演奏指導の実践を行い、誰もが実践できるヴォーカルパーカッション演奏指導法を探っていく。

はじめに

近年、子どもたちのリズムに関する能力が十分に発達していないと感じることが多い。毎夏、町内会の子どもたちを対象に祭り太鼓の稽古をしているが、基本となる三連符のリズムがとれず、上達に時間のかかる子どもも少なくない。教育の途にある子どもたちが、うまくリズムをとれないということは、学校においてリズムに関する教育が十分に行われていないということなのではないか。

この問題に対し、筆者は2000年以降、TVなどのメディアで取り上げられることの多くなったヴォーカルパーカッションが役に立つのではないかと考える。ヴォーカルパーカッションは口や声を

*茨城大学大学院教育学研究科 **茨城大学教育学部

用いて様々な音色を出す、リズム演奏法である。道具を使わず、場所をとることもない手軽さと、手の大小や、声量などの身体的な差異があまり影響しないため、演奏者の努力次第でどこまでも上達が可能という点は教材として非常に魅力的であるといえよう。

さらに、ヴォーカルパーカッションは習い事や課外活動などで経験したことのある人が少数であるため、歌やリコーダーに対して苦手意識を持っている生徒も、新たな気持ちで取り組むことができる。さらに、ヴォーカルパーカッションを用いた少人数のアカペラや、ヴォーカルパーカッション同士のセッションなどはもちろん、普段の授業ではあまり触れる機会のない、ロックやヒップホップなど、新しい音楽と出会いのきっかけとすることもできる。

通常、リズムに関する能力を養うための授業といえば、打楽器やそれらを使った合奏の授業が主となる。しかし、学校の環境として、多くの種類の楽器が人数分揃っているという事は多くない。そのような環境では、同じ種類の楽器を使う生徒が多くなったり、一つの楽器を順番に使ったりという状況が生じてしまい、十分な活動をする事は難しい。リズムに関する授業の教材として、最近では、ボディパーカッションが一般的になってきているが、これに加えて、工夫して多くの音を出すことができるヴォーカルパーカッションを扱うことで、表現の幅を一気に広げることができるのではないかと考える。

以上のことから私は、音楽科教育の中で、ヴォーカルパーカッションを教材として取り上げることを目的として、ヴォーカルパーカッションの研究を行っている。本研究ではその一環として、演奏法、演奏指導法に関して「8ビートの完成」と言う到達目標を設定し、研究していく。

先行研究

通常、ヴォーカルパーカッションが活用されるのはアカペラによる合唱においてである。無伴奏合唱という意味でのアカペラは今日では一般的になってきているが、ヴォーカルパーカッションが使われるような少人数でおこなうアカペラは、近年注目を受けるようになった分野である。教育芸術者から出版されている高校生の「音楽Ⅰ」の教科書『MOUSA①』では、「ヴォイパ付きア・カペラ」として、アカペラ合唱の曲とともに、ヴォーカルパーカッションの演奏法の解説が掲載されている¹⁾。しかし、これらを取り上げた授業、とりわけヴォーカルパーカッションを扱った授業実践例は極めて少ない。以下に示すものは、教員向けの雑誌や教育学の学会誌に掲載された教育活動における、ヴォーカルパーカッションの実践例である。

『教育音楽 中学高校版 2002年3月号』によると、岩本教諭は高等学校の合唱部の活動や音楽の授業において、少人数によるアカペラの合唱を取り入れ、小型のアンプとマイクを音楽室に常備し、いつでも練習できる環境づくりをした。その結果、岩本教諭がヴォーカルパーカッションの実技指導を行わなかったにもかかわらず、生徒たちはすすんでその研究にいそしんでいたという²⁾。

1) 畑中良輔・北澤肇・内藤淳一・寺澤直樹・上村幸一・桑山真理・岡部芳広・澤田育子・藤原康行
『MOUSA①』(教育芸術社 2012年), pp122-123.

2) 岩本達明「仲間とハモるって最高!」『教育音楽 中学・高校版 3月号』, 第46巻第3号, 2002年, p60.

西村教諭は中学校のいわゆる「3年生を送る会」の出し物としてヴォーカルパーカッションを用いたアカペラの合唱を取り入れたところ、練習時間以外でも生徒たちがヴォーカルパーカッションを練習する音が聞こえてきたそう³⁾。

竜田教諭が高等学校のボランティアとして始めた生徒に対するアカペラの合唱指導が、部活動に発展し、最終的には授業でアカペラの合唱を行うまでに至った⁴⁾。

こういった事例を踏まえ、アカペラやヴォーカルパーカッションの紹介をすることといった機会づくり、機材を設置するなどの環境づくりすることにとどまらず、教師自身が演奏の先導をすることで、生徒の興味や関心を高め、より高度な内容を取り扱うことができるのではないかと考える。

研究方法

本研究は演奏法研究と、演奏指導法研究の2つの観点で行う。演奏法研究は、ヴォーカルパーカッションの演奏法について書かれた書籍の内容の中から、3つの音色と基本的なリズムパターンの習得に焦点を当て、比較、分析することにより、習得が容易で、なおかつヴォーカルパーカッションとして遜色のない演奏法を筆者が考察する。その演奏法をもとに、指導実践を通して演奏指導法についての考察を行う。

ヴォーカルパーカッションとは

ヴォーカルパーカッションは、口や声を使って打楽器、主にドラムセットの様な音を出すリズム演奏の手法のことである。一般的にヴォーカルパーカッションは、「ボイパ」という名前で知られているが、これは「ヴォイスパーカッション」という名前で認識されているためである。日本において、ヴォーカルパーカッションやそれを用いた少人数アカペラ合唱が広く認知されるようになった際に発行された『ハモってみよう!!ハモネプSTART BOOK』には、この他にも「マウスドラム」または「リップドラム」「ヒューマンビートボックス」という名称も紹介されている⁵⁾。しかし現在、「マウスドラム」「リップドラム」という呼び方はあまり知られておらず、また、「ヒューマンビートボックス」は使う音色の種類や演奏の目的の違いから、ヴォーカルパーカッションとは別物として扱われることが多くなった。

・次ページに図1として、ドラムセットの各楽器の名称と、ヴォーカルパーカッションのリズムパターン五線譜に表す際の対応表を示す。

3) 西邑裕子 「三送会ハモネプで男子がノリまくった！」西邑裕子 編『TOSS 音楽 授業づくりシリーズ 第5巻 ヤンキー中学生も夢中 かわいい音楽授業』(明治図書出版株式会社, 2004年), pp132-139.

4) 竜田晴美 「ハモネプで輝く高校生達」『音楽教育実践ジャーナル』, vol. 3 no. 2, 2006年, pp43-51.

5) 古屋恵子 『ハモってみよう!!ハモネプSTART BOOK』(ドレミ楽譜出版社 2001年), p64.

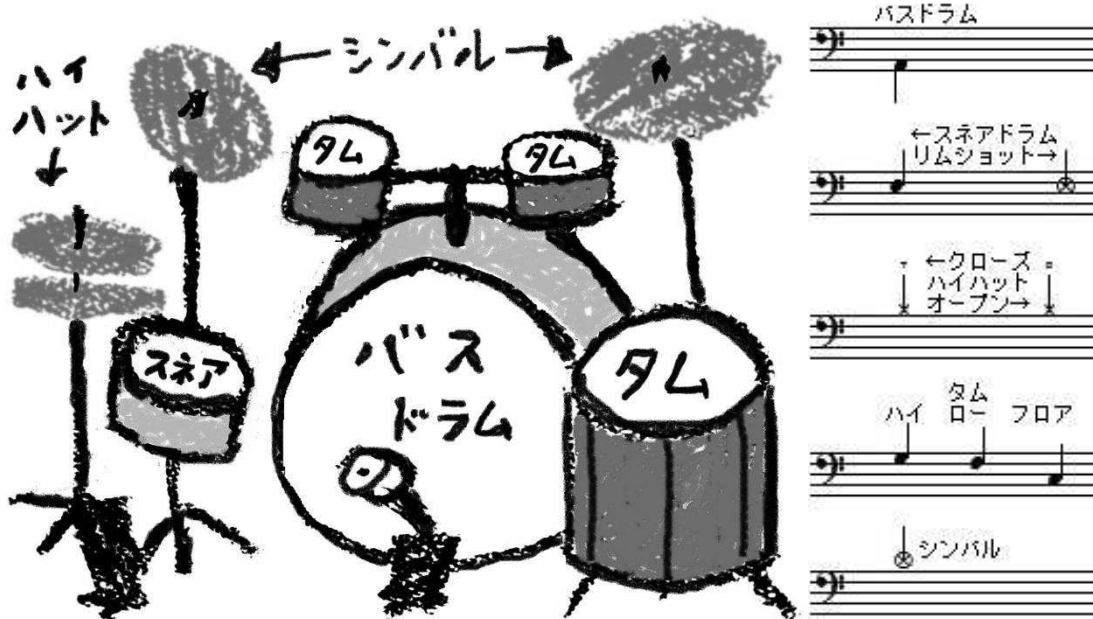


図1 一般的なドラムセットとその名称、及び楽譜として表現される際の記譜の一例

ヴォーカルパーカッションでは主にこれらの音を口で表現する。また、本論文で示す楽譜は、この対応表に基づいて記譜するものとする。

・有声式と無声式

『楽譜がいっぱい!!ハモネプ MASTER BOOK』では、ヴォーカルパーカッションの音の出し方について、有声式と無声式の二つに分類されている。この二つの違いは文字通り「声を使うか否か」である。またそれぞれのその他の特徴とし、有声式はマイクの有無にかかわらず同じような音色を出すことができ、無声式はマイクを通し、エフェクトをかけることなどで様々な音色を作っていくことができる⁶⁾とされている。

一般に有声式は初心者向けだと言われており、現在、多くの演奏者は有声式から始めている。しかし、声の高い人、特に女性の場合、バスドラムの音が軽くなってしまいがちなため、有声式と無声式を混合して使っている場合も多い。

ヴォーカルパーカッションには、決まった音の出し方ではなく、演奏者が「似ている」「出しやすい」と思える音を見つけていくのが本来の在り方である。そのこともあってか、現在では有声式の音色と無声式の音色を組み合わせる演奏者が多くなってきている。

ヴォーカルパーカッションの演奏法

ヴォーカルパーカッションを演奏する際、主に必要とされる音色は「バスドラム」「スネアドラム」

6) 古屋恵子『楽譜がいっぱい!!ハモネプ MASTER BOOK』(ドレミ楽譜出版社 2002年), p6.

「ハイハット」の3つというのが一般的である。それらの発音法、及び基礎となるリズムである8ビートの習得法について、記載されている書籍の内容を以下にまとめる。尚、この節ではヴォーカルパーカッションにおける音色のことを「楽器名」と表記し、楽器自体を表す場合には「 」を付けずに表記する。また、楽器の表記に関しては、書籍ごとに違いがあるため、バスドラム、スネアドラム、ハイハットに統一する。

『MOUSA1』⁷⁾

高等学校の音楽Iで用いられる教科書である本書では、音色の解説が中心に行われている。

バスドラムは口の中を広く広げて、唇は閉じる。深く低い声で「ドゥ」と発音する。スネアドラムは鋭く強い息で「タ」と発音する。ハイハットは短く鋭く「ツ」「チ」などと発音する。

ヴォーカルパーカッションパートはドラム譜で記載されており、楽譜に文字で「ドゥ」「ツ」「タ」のように書き込んだうえで演奏するよう楽譜上で「ハイハット」と「バスドラム」と「スネアドラム」が重複する場合は、「ハイハット」を省略して演奏するという解説がなされている。

『ハモってみよう!!ハモネプSTART BOOK』⁸⁾

この本では、ヴォーカルパーカッションをする際に必要になるスタンバイという状態の作り方から解説されている。わざとらしく咳をしようとした時の、喉に空気がたまり、出そうになっているのを抑えている感覚。これがスタンバイである。スタンバイは安定してリズムを刻んだり、澄んだ音を出したりするために必要不可欠なものとされている。以下、それぞれの楽器の音の出し方の解説をまとめることにする。

「スタンバイ」の状態から、「ドゥ」もしくは「ダッ」と言いながら、息を瞬間的に出し、それと同時に口を閉じると「バスドラム」の音が出る。この時、声はなるべく低くした方がきれいに聞こえる。少し余韻のある音を出したいときは「ドゥ」のあとに残っている息でハミング（鼻から息を抜きつつ「ン」と発音する）をすればよい。次に「スネアドラム」。「バスドラム」の音を高くする。スネアドラムの裏に張られているワイヤーの音を再現するためには、歯を軽く噛み合わせ、その状態で息を当てればよい。これらを組み合わせれば「スネアドラム」の完成。スネアドラムのふちをたたく音である「リムショット」は「スタンバイ」から息を吐かず、kやgの発音をしながら口をaの形にする。「カッ」という音が声を使わずに出せばよい。

最後に紹介されているのは各種シンバルの音だ。「クローズハイハット」は「モーツァルト」発音したときの「ツァ」の音を短く切って出す。このとき、口を横に広げると金属音に近くなる。口をすぼめて、「ツ」の音を使うと、アップテンポの曲でも安定しやすい。「オープンハイハット」では、「ツァ」の「ツ」を発音したら、そのままの口の形で息を出すと「ツー」という音になる。このとき「ツ」にアクセントを置き、そのあとの息の音は自然に抜ける程度の音にすると奇麗に聞こえる。

リズム習得に関しては、「ハイハット」や足踏みでリズムの基本となる拍の感覚を習得し、そこに

7) 畑中良輔・北澤肇・内藤淳一・寺澤直樹・上村幸一・桑山真理・岡部芳広・澤田育子・藤原康行『MOUSA①』（教育芸術社 2012年），pp122-123.

8) 古屋恵子『ハモってみよう!!ハモネプSTART BOOK』（ドレミ楽譜出版社 2001年），pp. 70-72.

「バスドラム」や「スネアドラム」の音を入れて行く、という形で解説されている。

まず、図2の様に4拍子の1・3拍目に「バスドラム」を、2・4拍目に「スネアドラム」を打つ。次に、図3の様に「バスドラム」と「スネアドラム」の間に「ハイハット」を入れる。これが8ビートの基本形である。尚、これは基本形であるため、2拍目の裏拍を「バスドラム」にするなど、場合によって音色を変更することが望ましい。



図2 『ハモってみよう!!ハモネプ START BOOK』で紹介されている譜例1

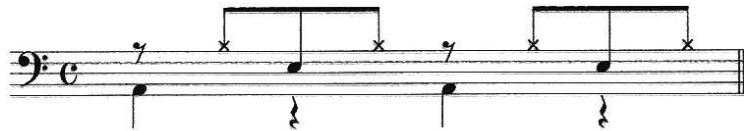


図3 『ハモってみよう!!ハモネプ START BOOK』で紹介されている譜例2

『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』⁹⁾

本書では、音色の習得よりも先に、メトロノームやリズムマシンなどに合わせて、「ハイハット」を中心に練習をする事から始める様に書かれている。「ハイハット」は、口をすぼめて「ツ」と発音するものと、口を横に広げて「チ」と発音するものの2種類で、「オープンハイハット」の時には音をのぼし、「クローズドハイハット」の時には短く切るようにする。8ビートの習得の第一歩としては、「ハイハット」の音を「ツ」「チ」を交互に刻むと良い。

まず、前段階としてジャズのドラムなどで使われる4ビートから習得する。図4の様に「クローズドハイハット」で4ビートを刻む。次に、図5の様に2拍目と4拍目の音を「オープンハイハット」にしたり、1拍目と3拍目の音を「オープンハイハット」にしたりすることで、一定のテンポで刻む感覚を身につける事ができるということだ。



図4 『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例1

9) 谷口恵治『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』(ヤマハミュージックメディア 2010年), pp. 27-30.

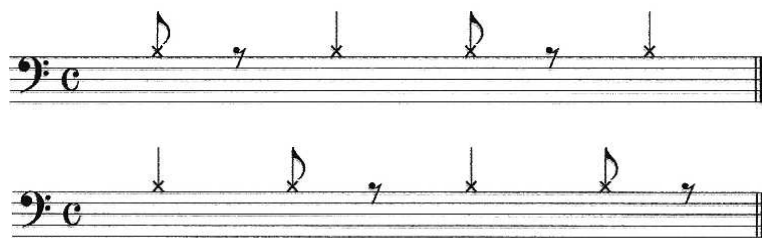


図5 『ヤマハムックシリーズ55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例2

次に8ビートを目指す。まず、「クローズドハイハット」の音を安定して出せるようになるまで図6の練習をする。この時、2・4拍目の表にしっかりとアクセントを入れることで、8ビートのリズム感をつかんでおくことが重要であるようだ。次に、4ビートの時と同様に、2・4拍目、あるいは1・3拍目にオープンハイハットを入れて練習する。

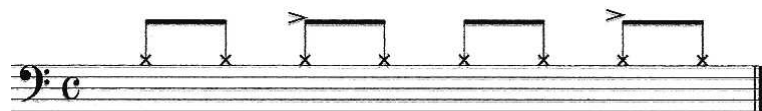


図6 『ヤマハムックシリーズ55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例3

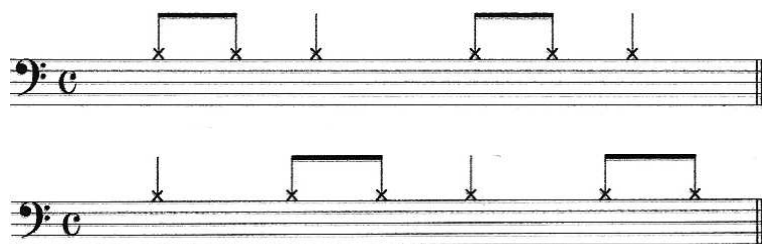


図7 『ヤマハムックシリーズ55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例4

以上のことができるようになれば、後は「ハイハット」の音を「バスドラム」と「スネアドラム」に変えていくことで、様々なリズムが出来上がる。バスドラムは残響がない音（デッド）を表現する場合は「ド」「ポ」「ブ」を同時に出したような音をイメージして、「ドゥ」と発音する。残響がある音の場合はドゥと出した後口をすぐに閉じて、音を鼻から逃がすように「ドゥン」と発音する。図6の1・3拍目の表を「バスドラム」に変えると、図8の様なりズムになり、これに加えて2・4拍目の裏を「バスドラム」に変えると図9の様なりズムが出来上がる。

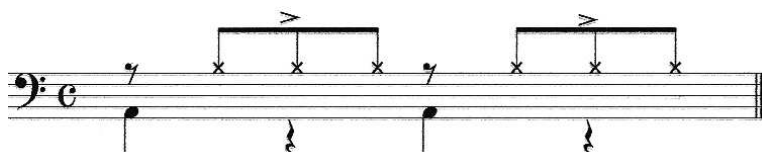


図8 『ヤマハムックシリーズ55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例7



図9 『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例8

最後に「スネアドラム」を組み込む。音色としては、「ダッ」「タッ」「カッ」「ドゥ」「ピシ」などのように、場合によって使い分けていくことが大切であると書かれている。図8の2・4拍目の表を「スネアドラム」に変えることで図10のリズム、同様に図9のリズムの2・4拍目を「スネアドラム」に変えることで図11のリズムを刻むことができるようになる」とされている。

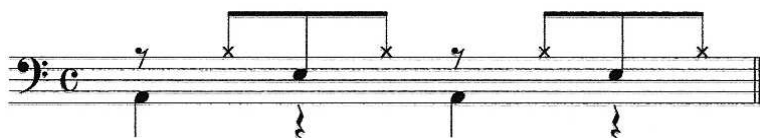


図10 『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例9



図11 『ヤマハムックシリーズ 55 ハモりにチャレンジ!』で紹介されている譜例10

『ゴスペラーズ パーフェクト・ハーモニーブック[歌おう]』¹⁰⁾

この書籍では、「ハイハット」、「バスドラム(本書では「キック」と記載)」、「スネアドラム」の発音法が中心で紹介されている。「ハイハット」は、歯を軽くかみ合わせて唇をあけ、唇の形を「イ」の形にする。そして、歯の裏に舌を軽く当てて、リコーダーのタンギングの要領でツツツと息を歯の間から押し出す。息を強めると大きい音が出る。声を出さずに、「ts」の発音だけになるように気をつける。息を長くすれば、「オープンハイハット」に、「ts」の発音に「k」を足して「tsktsk」と発音すると細かい音に対応することができる。「バスドラム」は、口の中に空間を作り、唇をしっかり締め、頬が膨らまないように息で圧力をかける。この状態で上唇を少し開くと、「ブツ」という音が奇麗に出る。「スネアドラム」の時も、口の開き方は変わらない。舌の奥の方を両方の奥歯に軽く触れるように上あごに近づけ、舌尖を上下どちらかの前歯につけておく。この状態で音を出し、息を吐くと、破裂音にスネアドラムの金属音を加えたものが表現できるようだ。

10) ゴスペラーズ『ゴスペラーズ パーフェクト・ハーモニーブック [歌おう]』(ヤマハミュージックメディア 2001年), pp. 65-66.

『だれでもカンタンアカペラはじめよう』¹¹⁾

本書では、音色よりも前にリズムの習得を行うよう。まず、四分音符を刻む練習として、メトロノームを聞きながら (♩=84) くらい四分音符だけでリズムを刻む練習する。この時、ピンポン球が弧を描きながら跳ね進むイメージを持つ、加えてバウンドする時 (つまり♩の音が出る時に) 回転がかかるイメージを持って練習するとグルーブが出ると記載されている。なお、最初は何の音がどの楽器に相当するかを意識しない方がよいとされている。

この本では音色について、「ボイパはドラムや楽器のパーカッションの真似をしているわけではなく、それ自体に深い可能性を持った楽器」であるため、「ドラムセットなどの楽器をそれほど意識しなくていい」とされており¹²⁾、音色の解説においても、実際の楽器の音を意識した発音法と筆者によるヴォーカルパーカッションならではの音の発音法とが明確に分けて記載している場合が多い。

まず、バスドラムをはじめとする低音系の音色。実際のバスドラムの音は無声音で息を止めた状態で、少し唇を尖らせて強く「ドゥッ、ドゥッ、ドゥッ」という音に近い。しかし、この発音法は他の音色と合わせリズムを構成しづらいことが多いため、「dm」という発音の組み合わせが紹介されている。舌の位置は日本語のタ行、ダ行を発音する時より少し奥にもっていくと深い音となる。「m」は鼻から勢い良く抜く。「d」の音を有声音にすることで、音に重みがあります。逆に軽くしたい場合は「d」を「t」に近づけると良いと解説されている。

スネアドラム系の音色は、楽器の音は舌を「t」の位置あたりにして息を強めに吸うことによって発生する音に近く、息を吸いながら「ツァッ」というように発音することでその音色を得ることが出来る。また、「ph」など、「p」の子音を使うことで、さらに乾いた音を出すことができる。この発音は、曲によって吸って音を出すか、吐いて音を出すかを使い分けると良いとされている。

ハイハットをはじめとする、ハイハット・シンバル系の音は、口を横に開き気味にして、「t」(トゥ) や「ts」(ツ) と発音する。音を伸ばしたい場合は「tss」のように「s」の音を伸ばすと良いようだ。

以上の内容を踏まえ、筆者が考える8ビート(図12)の完成を目的としたヴォーカルパーカッションの演奏法を以下に述べる。

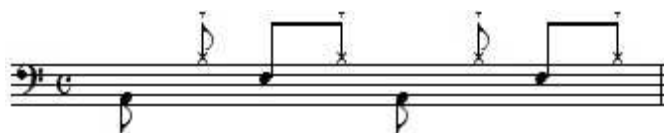


図12 基本的な8ビートのリズム

まずは、足踏みで4ビートのリズムを正確に打つことから始める。メトロノームやリズムマシンに合わせて足踏みをして、一定のテンポでリズムをきざむことができるようにする。この時、弾むように足踏みをすることで、拍の流れをつかみやすくなる。

11) Tsing-moo『だれでもカンタン アカペラはじめよう!!』(ケイ・エム・ピー 2002年), pp20-26.

12) 同上書, p22.

この足踏みに合わせ、八分音符で「ハイハット」を鳴らす。発音は、唇の形を「イ」の形に開け、そして、上前歯の裏に舌を軽く当てて、リコーダーのタンギングの要領で「ツ」または「チ」と息を歯の間から押し出すと良い。この時、音を短く切れれば「クローズハイハット」に、音を出した後、息を出し続ければ「オープンハイハット」になる。この「クローズドハイハット」を用いて図 13 を演奏する。アクセントを意識して演奏すること、8 ビートの感覚をつかむことができるだろう。十分に出来るようになったら足踏みをなくし、口のみでの演奏にする。

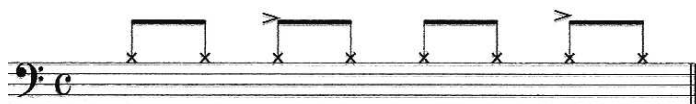


図 13 「ハイハット」のみでの練習

ドラムの音を出す際には、より強い破裂音を出せるようにするために必要となる「スタンバイ」と呼ばれる状態が必要となる。わざとらしく咳をする時の、空気をためて圧をかけている状態がこれに近く、有声式の場合は喉、無声式の場合は口先に空気がたまるようにすると良い。口先のスタンバイの状態から、唇をしっかりと締め、頬が膨らまないように息で圧力をかけ、「ブツ」と言う様に下唇を前にはじく「バスドラム」となる。この音色を使い、先ほどのハイハットのリズムを図 14 の様に変えて演奏する。

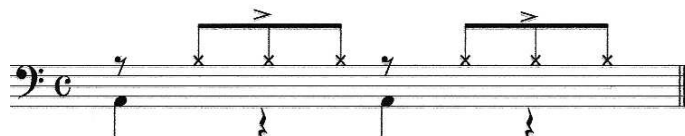


図 14 「バスドラム」を加えての練習

「スネアドラム」はドラム自体の音と、スナッピーと呼ばれる、楽器の裏側に張られているワイヤーの音の二つを組み合わせる。ドラム自体の音は、喉のスタンバイの状態から、口を少し横に広げ「イヒッ」と発音する。ワイヤーの音は、歯を軽く開けて、息を「ヒーッ」と吐き出す。これら 2 つの音を同時に出す。この音色を使い、図 15 のように演奏すれば、8 ビートは完成である。

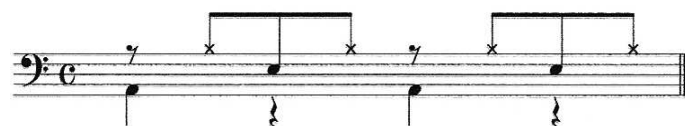
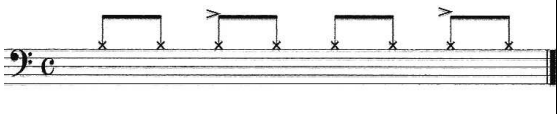

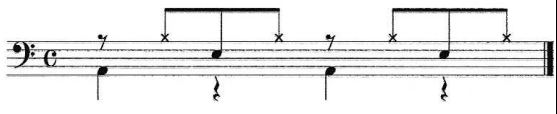


図 15 「スネアドラム」を加えての練習

演奏指導法

前項でまとめた演奏法を用いて、中学生、大学生、現職教員などを対象にヴォーカルパーカッションの演奏指導を行った。その際の流れを以下に示す。

指導の大まかな流れ	学習者に対する配慮、支援等
○その場で足踏みをする。	○ただ足踏みするだけでなく、弾むように足踏みをするように促し、拍の流れが自然と生まれるようにする。
<p>○「ハイハット」を習得する。</p> <p>○足踏みに合わせて「ハイハット」で演奏する。</p> 	○「クローズドハイハット」の音の切れ方が不十分な場合は、アクセントの音を「オープンハイハット」で演奏させることで、「クローズドハイハット」を短く切るという意識を持たせることができる。
○スタンバイの状態を作れるようになる。	○スタンバイの状態を創出するために、わざとらしく咳をさせる。学習者が思いきり咳をできるよう、まず指導者が大げさに実演する。
<p>○「バスドラム」を習得する。</p> <p>○「バスドラム」を加えて演奏する。</p> 	○マイク等の設備がある場合は、実際にマイクを通して発音させたり、それを聞いたりする活動をするとうい。○「バスドラム」から「ハイハット」への移り変わりにつまずきが見られる場合は一度速度を落とし、徐々に元の速度に戻す。
<p>○「スネアドラム」を習得する。</p> <p>○「スネアドラム」を加えて演奏する。</p> 	○うまく発音できない場合はスタンバイの状態がきちんとできているか確認してから発音させる。○音色の移り変わりでのつまずきに対しては「バスドラム」と同様の対処を行う。○演奏に慣れてきたら周りの音を聴くように働きかけ、8ビートが聞こえることを確認する。

考察

合計7回の実践を重ね、検討を重ねた末、上記の指導法を用いた約20分の実技指導で8ビートの完成させるに至った。またその際、受講者の方、計59人にアンケート形式で感想を記入していただいた。

まず、ヴォーカルパーカッションを知っていたか、という質問に対しては、知っていたという回答がほとんどで、知るきっかけとなったのはテレビ番組やインターネットの動画サイトが多く挙げられていた。一方で、ヴォーカルパーカッションを経験の有無を問う質問には、現職教員では経験したことがあるという回答は無かったが、大学生ではサークル活動等で経験したことがあるという回答が見られた。ヴォーカルパーカッションは、認知こそ広くされているものの、経験したことのある人は限られているというのが現状だ。どの年代の受講者の感想にも「難しいものだと思っていた」というような記述が見られたことから、ヴォーカルパーカッションは取り組みにくいものだというイメージが有ることが、経験者の少ない要因の一つといえるだろう。

しかし、演奏指導の後、これからもヴォーカルパーカッションをやってみたいかという質問に対し、「是非やってみたい」という回答が23人、「やってみたい」という回答が22人と、7割以上の受講者からヴォーカルパーカッションに魅力を感じたという回答が得られた。また、「あまりやりたくない」という回答をした受講者でも、自由記述の欄では「いろいろな人の演奏が聴きたくなった」「聞いているのは楽しい」等の記述が見られたことから、聴き手としてヴォーカルパーカッションに魅力を感じることが出来たようだ。この様に、ヴォーカルパーカッションは一度経験し、演奏の基礎を学ぶと、非常に身近で魅力的なものとなることがわかった。

指導の内容についてだが、やはり技術的な面で、学習者に不安が残るという課題が残されている。特にスネアドラムに関しては、筆者が最初に用いていた「ドラム自体の音は、口をすぼめてトゥッと発音する。ワイヤーの音は、歯を軽く噛み合わせて、息をフーッと吐き出す。この2つの音を同時に出す。」という解説では、2つの音を同時に出すという感覚は伝わりづらいようで、受講者に対するアンケートの「解説は分かりやすかったか」という設問に対し、「やや良」「やや不良」の回答が多かった。現行の音色のへと変更を試みたところ、ある程度の改善は見られ、改善後のアンケートでは「やや不良」の回答はなく、学習者で一斉に演奏するとヴォーカルパーカッションとして遜色のないものとなったが、「やや良」という回答もまだあったため、更に改善の余地はあるだろう。今後は、解説する際の表現の工夫や、目指すべき音色の吟味をすることで、更に学習者一人ひとりの音色を精練できる指導法を探っていきたい。

また、演奏の指導に加え、曲にあったリズムパターンを作成するという創作活動を実践する機会もあった。その際は、学習者同士が話し合い、影響しあって回答を作成するといった様子も見受けられ、創作活動の授業への応用の可能性を見出すこともできた。今後も様々な実践を重ねることで、ヴォーカルパーカッションの教材的価値を更に高めていきたい。